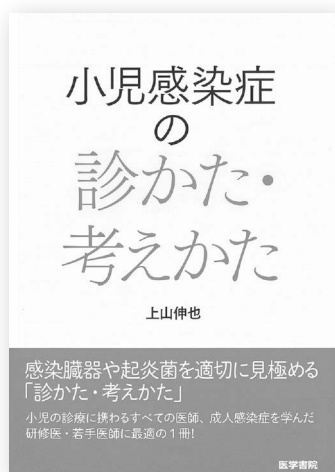




小児感染症の 診かた・考えかた

上山伸也＝著

定価：本体 4,400 円＋税
A5・448 頁／医学書院／2018
[ISBN978-4-260-03645-0]

すごく深いのに読みやすい！ 小児感染症の最良書

評者 笠井正志 兵庫県立こども病院 感染症内科

本書の著者である上山先生と私は、本邦の臨床小児感染症が始まっていない時期から、共に手探りで「小児感染症」の勉強を始めた仲間です。修練の質や勉強のやり方が違うのか、上山先生の方が同じ感染症医としてはるかに先に行かれています…。さて、「小児感染症の良書はない」と言われて久しい本邦の小児医療現場でしたが（私も書いたり監修したりしているが、そうかもしれない笑）、本書のおかげでその汚名をそそぐことができた「スゴイ」本だと思います。本書を通読して感じた「スゴさ」を述べます。

ここがスゴイ①かゆいところまで届く詳しさ

それを特に感じたければ、まず Chapter 4「小児における熱源不明の発熱へのアプローチ—fever without source」を読まれるとよいでしょう。乳幼児の発熱に関するパルがあふれる章です。重症細菌感染症を rule out するには Hib（ヘモフィルス・インフルエンザ菌 b 型）・肺炎球菌ワクチンの「2 回」接種の確認が必要であることが、詳しく記述されています。多くの書は「ワクチン歴」と単純化していることが多いのに、秀逸です。他章にも、多くの臨床カルパルが散りばめられています。

ここがスゴイ②口語調で読みやすい

本書の真骨頂は、Chapter 5 以降の各論（呼吸器、頭頸部、中枢神経、尿路、血管内、腹部、皮膚・軟部組織、骨・関節、新生児、学校）です。各論は、本当に臨床を経験していないと、どこか海外の教科書を「まるっと」翻訳したような生硬な文章になりがちです。上山先生の臨床知識の深さ・経験の幅・洞察力が体现される書き様だと思います。本当に臨床現場で上山先生に質問や相談を受けているような、そんな臨場感を感じることができます。

ここがスゴイ③単著である

論文は共同作業ですが、書籍の執筆は孤独な作業です。臨床をしながら医学書を 1 人で 1 冊書くのは、ホント大変なのです。世の中にはたくさんの「共著」がありますが、やはり読み手の目線からすれば、ロジックに一貫性がある「単著」がよいのは言うまでもありません。特に若手のうちは、いろいろな人から教えてもらうより、1 人の良き師から徒弟制的にじっくり教わるのがよいように、まずその世界を大きく広く知るなら単著を読むべきでしょう。



最後に、本書は、小児と感染症に関わるすべての医療者、すなわち小児科医・小児感染症医だけでなく、感染症医・内科医・外科医・家庭医などの医師、薬剤師・微生物検査技師・感染管理認定看護師は、手にするだけではなく必ず通読すべき良書であると確信し推薦します。

